

令和3年度第3回市民活動センター評価委員会の摘録

日 時：令和3年7月27日（火）午後2時00分～午後3時30分

場 所：京都市文化市民局地域自治推進室 会議室

出席者：

（委員，敬称略）中井 歩（京都産業大学教授）＜委員長＞

東郷 寛（近畿大学経営学部准教授）＜副委員長＞

伊豆田千加（特定非営利活動法人子育ては親育て・みのりのもり劇場理事長）

重野亜久里（特定非営利活動法人多文化共生センターきょうと代表）

鈴木 ちよ（市民公募委員）

※ 土江田委員は欠席

（事務局）京都市文化市民局地域自治推進室

地域コミュニティ活性化

・北部山間振興部長 廣瀬 智史

市民活動支援課長 永田 彰

市民活動支援係長 岡部 麻紀

担当 岩沢 真梨絵

傍聴者：2名

取材者：なし

議 事：（1）令和2年度市民活動総合センター評価報告（案）の検討について

開催概要

1 開会

2 議事

（1）令和2年度市民活動総合センター評価報告（案）の検討について

事務局から「令和2年度市民活動総合センターの管理運営についての評価報告（案）」について概要を説明後，評価項目ごとに達成度及び記載内容の検討を行った。

※ 各項目に対する委員個人の達成度評価及び意見を共有したうえで議論を進めた。

【基礎評価】

<情報提供>

（委員）

「コロナほっとかないポータル」を年度当初に立ち上げた点については，どの委員も高い評価をしている。達成度は「A」か「B」になると思うが，いかがか。

（委員）

全項目に関わることだが，今後の取組に活かしてもらえるような評価をする必要がある。応援の思いを込めて優しめの評価をするか，厳しく評価をするかについて，最初に決めておくべきではないか。

（委員）

新型コロナウイルス感染症の影響を受けて目標が達成できなかったと捉えるか、厳しい環境の中でも頑張っ取り組んだと考えるかで、評価が変わってくる。

(委員)

本項目については、どの委員からも改善すべき点に関する意見が出されていないので、達成度は「A」で良いのではないか。

(委員)

「特に優れた成果があった」とまでは言えないと思うので、私は「B」とした。

(委員)

コロナ禍においてもできる範囲で質の高い取組を迅速にされたことから、私は「A」とした。あえて付帯意見として言うなら、仕様書に記載のある「NPOと地縁組織や企業、行政等をつなぎ、連携を生み出す情報収集と提供」について、更に期待したい。

(委員)

それでは、前向きに評価するというので、コロナ禍という厳しい環境の中で、時宜にかなった情報提供を迅速に行った点を評価し達成度を「A」としたうえで、市民活動団体とステークホルダーの連携を生み出し、よりよい関係性構築につながるような情報の発信にも期待することを付帯意見とする。

<相談>

(委員)

委員によって評価が割れている。達成度を「A」とした委員と「C」とした委員がいるので、折衷案で「B」にしてはどうか。

(委員)

コロナ禍ではあるが、電話やメールでの相談件数は多い。また、「NPO法人コンサルティングBook」の発行など、成果を一定形にできている。今後の取組への期待も込めて私は「A」とした。

(委員)

私は「C」とした。相談件数自体は増えているが、現在対応しているレベル以上の相談にも対応すべきだと考えている。

現在の市民活動総合センター（以下「しみセン」と言う。）は、NPOの「初級者」に対する支援を行う場となっている。コンサルティングBookの作成を含め、これまでの取組は素晴らしいが、ある程度インターネットでも調べることができる内容である。たとえば起業や他団体とのマッチングに関する相談にも対応するなど、相談の在り方自体を見直す時期に来ているのではないか。

(委員)

市民活動団体には様々な層があるが、経験豊富なNPO法人からよりも、地域の集まりに近い団体からの相談ニーズの方が高く、結果としてしみセンの相談事業は、後者に対応したものとなっている。

(委員)

今後は、コワーキングに関する相談や、少しでも市民活動を実施したいという層からの相談など、多様な相談に対応していくべきだと思う。今回評価するうえでは、こうし

た相談に対応できているかどうかを判断基準に含めるか、決めておく必要がある。

(委員)

昨年度までどのように評価してきたのかも考慮すべきである。

(委員)

これまでは明確な基準がなく、委員それぞれの経験や知識に基づいて評価を実施してきた。

(委員)

評価基準としては、これまでから「目標に対する達成度」とされていたが、評価に当たっての達成すべき「目標」とは、「仕様書に記載された内容の事業を実施すること」ということを改めて確認したところであり、これを踏まえて評価を行うこととなる。

事業計画には「多様化する相談内容に対応するため、幅広く市民活動や非営利組織の情報を収集し、職員の相談対応でのスキルアップをはかる」とある。この点について、達成できたと言えるだろうか。

(委員)

十分に達成できたとは言えないと思う。

(委員)

市民活動団体からの相談内容はかなり前から変化してきており、これまでの枠組みでは対応しきれなくなってきた。相談事業の見直しをすべきという指摘は以前からあったが、現在の評価の基準には組み込めていない。

(委員)

仕様書には「幅広い分野の市民活動及び社会貢献活動等に関する各種相談」等が挙げられているが、事業計画には「多様化する相談内容に対応」と記載されており、ハードルを上げていると思われる。

コロナ禍で頑張って取り組まれたが、相談内容の多様化への対応も期待したいことから、達成度は「B」かと思う。付帯意見として、市民活動団体が置かれる状況の把握に努めたうえで、新型コロナウイルス感染症の影響により加速した相談内容の多様化に対応することへの期待を記載することとしたい。

<育成>

(委員)

コロナ禍において各講座を実施できただけでも十分評価に値する。オンラインによる実施など、柔軟に対応されたと思う。達成度は「A」だと思う。

(委員)

「目標は達成した」という点で、達成度は「C」が妥当ではないか。一方で、一般的には「C」評価と聞くと、目標が達成できていないように感じられる。

(委員)

達成度の基準については過去にも議論があり、今の評価方法に落ち着いた経過がある。

(委員)

特に改善すべきとする内容の意見は出しておらず、育成事業の大きな柱のひとつである「無関心層・潜在的関心層を対象とした『公開講座』の開催を促進する」ことについて

は十分成功していることから、達成度は「A」にしたいと思う。

<交流・連携>

(委員)

市縁堂に対する評価はどの委員も高そうだが、以前から課題となっていたいきいき市民活動センターとの連携やボランティア・コーディネートについてはいかがか。

(委員)

達成度は「B」だと思う。

(委員)

市縁堂は成功した一方で、目標が達成できなかった部分もあるため、「B」にしたいと思う。また、付帯意見には、この両面について記載することとしたい。

<サービス向上>

(委員)

他の項目と比べ、特に目立った成果がないように感じたため達成度は「C」としていたが、改めて利用者アンケートの結果を見ると、センター機能が役に立ったという回答が多く、また、オンライン会議ができる環境整備を早急に進められていることなどから、もう少し高い評価をすべきかもしれない。これまで誰も経験したことのないような状況の中、施設の利用方法を柔軟に変えられている。オンラインでの取組も必要だが、実際に多くの利用者が通い続けられる安心感のある場となっており、その重要性を考慮すべきだと考える。

(委員)

サービス向上については、ハード面とソフト面での取組があるが、特にソフト面に関しては、高いコミュニティ力を活かした取組をされている。新型コロナウイルスの感染者が出ていないだけでも高評価である。

(委員)

コロナ禍でもセンター機能を維持できたことが最大のサービスであると言える。安心・安全にセンターを維持できたことから、達成度は「A」としたい。

<施設管理>

(委員)

以前参加したあるシンポジウムの会場において、カフェや座禅スペースを設けるなど、リラックスできる空間を上手に取り入れられていたことが印象に残っている。しみセンにも、これまで施設を訪れたことのない人が来てみたいと思えるような仕掛けがあるとよいと思う。

(委員)

確かにそのような場があれば、新たなつながりが生まれたり、アイディアの共有ができたりするかもしれない。

(委員)

小型ロッカーの利用については、前回も課題となっていた。利用促進を図ることは難

しいのか。そもそも小型ロッカーを設置するかどうかも含めて検討すべきではないか。

(委員)

ロッカーは何のために設置しているのか。

(事務局)

しみセンを拠点に活動する団体が、活動備品を保管するために利用している。

(委員)

小型ロッカーは、サイズが小さく使いにくいのだと思う。

(委員)

小型ロッカーについては、あり方も含めて活用方法を検討することを付帯意見としたい。

<執行体制>

(委員)

報告書案には、コロナ禍を契機に増えたテレワークの利点を活かしつつ、ワーク・ライフ・バランスを進めることについて記載されている。記載内容は問題ないと思う。

<財務状況>

(委員)

人件費が高い比率を占めているが、もう少しプロモーションにかける予算を増やすなど、構成比率を変えられれば理想的だと思う。報告書案の文章自体は、修正不要だと思う。

【全体評価】

(委員)

報告書案には、アフターコロナにおける市民活動団体の状況についてポジティブな記載がされているが、新型コロナウイルス感染症の影響により存続の危機に立たされ、活動方法や事業内容の改変を余儀なくされている団体もある。このような苦境に立つ団体が、うまく課題に対応できるような支援もすべきではないか。

(委員)

「ウィズコロナ・アフターコロナに柔軟に対応できるコミュニティづくり」につながるのには、相当難しいと思う。このようなコミュニティづくりにつながるような「支援体制を構築」してほしい、という内容にしてはどうか。

(委員)

それでは、「新しい支援の在り方も模索し、ウィズコロナ・アフターコロナにおける市民活動団体の状況にも柔軟に対応できる体制を構築していただきたい」という記載でどうか。

(委員)

コロナ禍で厳しい状況にある団体への支援も含めた表現になり、良いと思う。